



Title	トルコにおけるシリア難民の子どもの現状と発達障害支援の課題
Author(s)	小原, 啓吾; 岡田, 智; 景平, 義文 他
Citation	子ども発達臨床研究, 14, 33-47
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.14.33
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77558
Type	departmental bulletin paper
File Information	060-1882-1707-14.pdf



トルコにおけるシリア難民の子どもの現状と発達障害支援の課題

小原 啓吾¹・岡田 智²・景平 義文³・吉川 剛史³・Dilara Özel⁴

Situation of Syrian Refugee Children in Turkey and the Challenges in Supporting Children with Intellectual Disabilities

Keigo OBARA, Satoshi OKADA, Yoshifumi KAGEHIRA,
Takefumi YOSHIKAWA, Dilara Özel

要 旨

2019 年 10 月に、小原及び岡田は国際 NGO AAR Japan がトルコで運営するシリア難民のためのコミュニティセンターへの訪問と、シリア難民の子どものいる家族へのインタビュー、トルコの学校臨床や難民支援の研究者との交流の機会を得た。本稿では、フィールドワークを通して、トルコでのシリア難民の子どもたちの状況やその発達支援を改善する可能性について把握しようと試みた。また、現地トルコで子どもや女性のシリア難民支援を行っている AAR Japan の吉川氏の協力を得て AAR Japan の活動について報告をしてもらった。さらに、トルコの学校やスクールカウンセリングの調査研究を行っている Middle East Technical University の Özel 氏にもトルコの学校でのシリア難民の受け入れ状況について寄稿してもらった。フィールドワーク及び現地研究者・支援者からのレポートからは、神経発達の問題（特に認知発達）や心理的問題などが、生活困窮、多言語の問題や過密化する教室の問題に圧倒され、焦点化されない実情が垣間見えた。難民の流入で公共サービスが過密化・多様化する状況では、シリア難民の居住区は増え、学校にもシリア難民が増大していくがその一方で、地域は希薄化し、より一層難民家族が孤立していく。国連機関による自治体支援や AAR などの NGO によるコミュニティセンターはこのようなギャップを埋める可能性があり、発達障害やスクールカウンセリングの専門家と連携して子どもの診断・ニーズの把握・支援体制の構築を行うことで状況の改善につながるのではないかと考えられた。

1. はじめに

トルコにおけるシリア難民の問題は長期化している。それに伴い、子どもたちは、未就学及び学校

不適応、児童労働、若年婚などさまざまなリスクに面している。本稿は、トルコと中央アジア諸国で食料アクセシビリティに関する調査・支援を行っている国連食糧農業機関（Food and Agriculture

¹ Food and Agriculture Organization of the United Nations (FAO)

² Hokkaido University

³ Association for Aid and Relief (AAR), Japan

⁴ Middle East Technical University

Organization of United Nations；以下 FAO）第 1 著者小原と、北海道大学で子どもの発達臨床研究・支援を行っている第 4 著者岡田が、2019 年 10 月に、トルコのイスタンブール、アンカラ、シャンルウルファ、その他南東アナトリア地方でのフィールドワークの機会を得たが、その報告を行う。また、今回のフィールドワークの受け入れ先の一つとなった AAR Japan 吉川氏に、AAR Japan で行っている子ども及び家族の支援についても報告をしてもらった。さらに、トルコの学校でのスクールカウンセリング及び難民支援の研究を行っている Özel 氏にも、寄稿してもらった。本稿目的は、これらのレポートを通して、日本においてもトルコにおける難民の子どもの状況について関心を寄せてもらうとともに、逆境状況にある子どもたちへの発達臨床の在り方を探求していくことが目的である。

（小原啓吾・岡田智）

2. トルコにおけるシリア難民の課題

2011 年のシリア内戦以降、約 370 万人のシリア人がトルコに難民として移住し、2019 年現在、トルコは世界最大の難民受け入れ国となっている。難民とはいえ、難民だけが生活する施設（いわゆる「難民キャンプ」）で生活しているのは全体の 4% にも満たず、ほぼすべての難民が市街地などにトルコ人の一般住民と一緒に生活している（UNHCR, 2019）下部^{注1}。シリア国内の治安や社会経済の状況は内戦開始から 8 年を経た 2019 年現在も改善が見られないため、トルコにいるシリア難民のほとんどは数年に渡りトルコで生活し、さらに今後、シリア国内の状況が急激に好転しな

いかぎりトルコ国内のシリア難民は中・長期的に現地の一般住民と共存してゆくことになると見られている。

トルコ政府は関連する国際的な憲章と国内法に則り、シリア難民が一般住民と同様の公共サービスを受けられるように保証している。これらの公共サービスには保健・教育・就労などが含まれる。その一方で約 370 万人という巨大なニーズに公共サービスの提供が追いつかない状況が生じている。特にシリア難民の数が多き南東アナトリア地方の自治体では特に顕著で、ごみ処理や公共交通にはじまり、過密化する病院や学校などで提供されるサービスの低下の懸念が大きくなっている。このような地域では国連機関をはじめとする国内外の機関が公共サービスを活発に支援または補完しており、国連の推計によれば 2014 年から 2018 年までにおよそ 5 千 3 百万米ドル（58 億円）が国際社会から支援された（United Nations System in Turkey, 2019）。支援の多くは地方自治体が公共サービスを向上させるためのキャパシティ・ビルディング（組織能力の向上）と関連する施設の強化に向けられた。例えば、UNICEF は 88 の自治体がシリア難民とトルコの子どもの保護を適切に行えるよう、関連する自治体組織に研修を行い、子どもの保護に適した施設を提供した。また、シリア難民の生活水準を保証するための重要な社会保障制度として、2016 年から「緊急社会セーフティネット」（The Emergency Social Safety Net；以下 ESSN）が実施されている。ESSN は社会経済的に脆弱なシリア難民の家庭が食料・電気・水・家賃など生活に最低限必要な出費がまかなえるよう、家族の数に応じた金額を毎月支給している。2019 年現在、トルコにおけるシリア難民の半数

^{注1} UNHCR；The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees 国連難民高等弁務官事務所は、第二次世界大戦後の 1950 年、避難を余儀なくされたり、家を失った何百万人ものヨーロッパ人を救うために設立され、半世紀以上経った今日も、世界中の難民の保護や支援に取り組んでいる。現在は、難民問題の拡大、複雑化に対応するため、世界各地の政府、民間から支援を受け、以下の 3 つの任務を行っている。①難民の諸権利（強制送還の禁止・就業・教育・居住・移動の自由など）を守り、促進する「国際的保護」、②衣食住の提供、医療・衛生活動、学校・診療所など社会基盤の整備などの「緊急事態における物的援助」及びその後の「自立援助」、③自主的な本国への帰還、一次庇護国での定住、第三国への定住などを主導・調整する「難民問題の解決へ向けた国際的な活動」)

近くの約 170 万人が ESSN を受給している (World Food Programme, 2019)。支援金額は物価水準により決められ、2016 年の ESSN の開始当初は家族一人あたり月額 100 トルコリラ (約 2000 円) が支給されていたが、2018 年からの急激な物価上昇を背景に 2019 年 12 月現在は 120 トルコリラ (約 2200 円) が支給されている。ESSN 受給の選考基準には就労状況などの経済的な基準に加え、家族の中の障害者の有無も含まれている (European Commission's Directorate-General for European Civil Protection and Humanitarian Aid Operations, 2019)。

自治体による公共サービスの質の低下や、シリア難民を対象にした大規模な社会保障の実施、そして、大量のシリア難民の労働市場への流入といった大きな社会的変化が重なった結果、現地の人々のシリア難民に対する敵対心がここ数年で高まっていると言われている。2011 年当初はシリア難民を内戦の被害者として現地コミュニティが広く迎え入れていたが、2017 年頃からシリア難民とトルコ人の小規模な対立が少しずつ増えていることが報告されている (Crisis Group, 2018)。例えば、人口の約 2 割がシリア難民のトルコ南東部のシャンリウルフア市では家族間の口論が 2 つのコミュニティの間の対立に発展し、2 人のトルコ人が殺害されるという事件があった。

(小原啓吾)



Figure 1 シャンリウルフア市郊外の住宅地のスーパー

農業が盛んなトルコでは、一般のスーパーには新鮮でおいしい野菜が並ぶ。しかし、低所得及び難民が多く住む地域の店では低価格ではあるが傷んでいる野菜も多い。子どもがよく店番をしている。



Figure 2 観光地シャンリウルフア城の裏にある住宅地

トルコではホームレスはほとんど見かけないが、劣悪な住居が並ぶ区域は多く見かける。首都アンカラでもアンカラ城裏にはこのような住宅地が広がり、子どもたちに道を尋ねた第二著者が「money!!」「money!!」と請求された。

3. トルコにおけるシリア難民と学校の状況

このような状況において特筆すべきなのは、内戦開始時点でのシリアの人口動態を反映して、難民としてトルコに移動した 370 万人のうちおよそ半分が 16 才以下の子どもであるということである (UNHCR, 2019)。国連の「子どもの権利に関する憲章」の批准国として、トルコはトルコ国内で暮らすすべての子どもは政府による保護を受ける権利を保証することになっており、これには教育機会の提供も含まれる。しかし、国連などの推計調査によると就学人口のシリア難民のうち約 4 割近くが学校に通っていないと見られており (United Nations System in Turkey, 2019)、そのことによる難民の若者の失業・貧困・社会統合 (インテグレーション) の欠如が問題化している。小学校のうちに通学率が高いものの、学年が上がるにつれて退学する子どもが増える傾向にある。

トルコにおけるシリア難民の子どもの教育に関しては多くの問題があると見られている。まず最初に、難民の家族が就学適齢期の子どもを学校に行かせようとしないことが広く報告されている。特に難民キャンプの外に滞在する家庭の子どもは 14%しか学校に通っていないという調査の報告もある (トルコ内務省災害緊急事態対策庁, 2014)。子どもが学校に行かない理由としては多様な理由が

報告されているが、主なものは子どもを収入源と見なしている家庭が多いため (Kaya and Kırac, 2016) という事実と、子どもを異文化の中で育てることに不安 (Apak, 2014) が挙げられている。

シリア難民が厳しい経済状況に対応するために児童労働させているという報告も少なからずあるが、実態はあまりよく調査されていない。児童労働はシリア難民が流入する前からトルコでは問題になっていたことが知られており、シリア難民がまだ多くなかった 2012 年に行われた調査では約 90 万人の 6 歳から 17 歳の子どもが児童労働の経験があるとされている (トルコ統計局 2013)。近年ではシリア難民の子どもが移動季節労働に従事していることも報告されている (Development Workshop, 2018)。

言語の違いは大きな問題として広く指摘されている。学校ではトルコ人の生徒と先生はごく少しの例外をのぞいてアラビア語を解さず、シリア人の生徒はトルコ語が分からない。授業は当然トルコ語で行われるため、シリア人の生徒の数が多くなればなるほど先生にとって負担になる。シリア人の親もトルコ語を解さないため必要なときに連絡が取れないことも問題になっている。また、シリア人の生徒が内戦と移民の経験から抱えたトラウマや困難な経験について、学校の先生たちは想像もできないような事と感じ、そのような子どもたちを指導するには不適格ではないかと考える先生も多いという。このことは難民の生徒の心理的支援の必要性を提起している (Özel, 2018)。

シリア難民は均一的ではなく様々な社会経済階層・出身地・文化的な環境が背景にあるため、難民の子どもたちを差異を無視した均一的な集団と捉えることは不可能である (Şeker and Sirkeci, 2015)。しかし、シリア難民が流入し始めてからこれまで、言語の問題や心理的な支援の必要性といった最重要の課題が十分に考慮されていない学校教育が難民と地元の人々の状況適応に負の影響を及ぼしているといえる。このような状況が長く続くことにより、地元の生徒・家庭・先生による難民の子どもへの偏見の助長が懸念される。

(Dilara Özel)

4. トルコにおけるシリア難民の子ども国際支援の状況

約 370 万人のトルコ在住のシリア難民の内およそ半分が 16 才以下の子どもであるため、子どもの保護は国際支援の重要課題の一つとされており、そのことは国連によるシリア支援年次計画 (Regional Refugee Resilience Plan; 以下 3RP) に明示されている (United Nations System in Turkey, 2019)。国連機関や外国援助機関は保護施設の提供・保護の実施・学校通学の支援を再優先の活動にしている。

子どもの学校通学に関する国際支援では「教育のための現金支給プログラム」が挙げられる。「教育のための現金支給プログラム」は女の子や中学生などドロップアウトが懸念されるグループが学校に通えるようにその家族に現金を支給している。このプログラムは 2017 年に始まり、最初の年に約 37 万人の子どもを支援した。これは同じ時期に通学していた子どもの約 6 割に相当する。さらに、通学ができなくなった子どもを対象にしたプログラムとして Accelerated Learning Programme (以下 ALP) が国際支援により 2018 年から開始された。これは 3 年以上学校に通っていない子どもを対象に教育の機会を提供し、最終的に学校に戻ることを目標にしている。

また、複雑な状況下での子どものニーズの把握と政策提言も国連機関の重要な役割の一つになっている。例えば、シリア難民の子どもが暴力やいじめなどにあった場合に、支援を受けられる施設や制度を家庭 (特に母親) がほとんど知らないことについて、最近の国連機関による調査の結果として提起されている (UNWomen, 2018)。児童婚や児童労働の問題も調査数は少ないものの、国際 NGO などによって実態の一部が報告されている (Development Workshop, 2018 など)。特に児童労働に関してはさらなる実態の把握と政策支援のために国連機関と NGO によるタスクフォースが形成されている (United Nations System in Turkey, 2019)。

難民の子ども流入で学校が過密化している状況・学校での言語教育・変化する状況下で先生が



Figure 3 平日午前中の涼しい時間に廃屋の鉄材を集めている

子どもたちの集団と、それを取り仕切る女性



Figure 4 市場でシャンルウルフアの特産品のピスタチオを売る子ども

対応できるようなトレーニングの必要性は国連によるシリア支援年次計画で強調されているが (United Nations System in Turkey, 2019)、全体のニーズに対して支援の規模は非常に小さい。

(小原啓吾)

5. AAR Japan「難民を助ける会」のトルコでの活動における子どもの支援

AAR Japan「難民を助ける会」は、1979年に設立された国際NGOである。2020年1月現在、15カ国（日本を含む）で活動している。難民支援などの緊急支援以外に、障がい者支援、地雷・不発弾対策、感染症対策、啓発活動を行っている。トルコにおいては、2012年10月からシリア難民を支援している。

2019年12月現在、トルコで避難生活を送るシリア難民は約370万人である。シリアは世界で最

も多く、多くの難民を生み出している国であり、トルコは世界で最も多くの難民を受け入れている国である。日本では、難民は難民キャンプで生活している、というイメージが強いようであるが、トルコのシリア難民のうち難民キャンプで生活している人たちは1.7%に過ぎない。大多数の難民は、トルコの普通の街中で家を借りて生活している。難民は自分たちで収入を得て、自活していかなければならないのである。トルコ政府は難民に対して寛容な政策を取っており、一時的保護の登録 (Temporary Protection) を済ませれば、医療や教育などの公的サービスに無償でアクセスすることができる。その意味では、トルコで避難生活を送るシリア難民の権利は、受け入れ国であるトルコ政府によってある程度保障されているといえる。

しかしながら、難民が何の問題もなく生活できているかというと、必ずしもそうではない。一時的保護の登録の方法を知らない、あるいは登録が完了するまで何ヶ月も待たなければならないことがある。そして、登録が完了しても言葉が通じないため適切な医療を受けることができない、あるいは、トルコの公立学校への登録がスムーズに進まないなど色々な問題が起きている。また、シリア難民は故郷からトルコに逃れてくる際に、家族や親族などと離れ離れになるケースが多く、避難先において知り合いがおらず、孤立した生活を送る難民が存在する。加えて、トルコ社会がシリア難民に向ける感情は年々陰しくなっている。当会が事務所を構えるトルコ南東部のシャンルウルフア県においては、2018年9月にシリア人がトルコ人を口論の末に銃で殺害する事件が発生したことにより、一部のトルコ人が暴徒化し、事件に無関係のシリア人商店を襲撃する、あるいは、シリア人の住居に投石するなどの事態に発展した。

そのような状況を踏まえ、AAR Japanはシャンルウルフア県にコミュニティセンターを設置し、子どもと女性を主なターゲットとして以下の3点を運営目的とした活動を実施している。

- 1) 脆弱なシリア人住民およびトルコ人住民に

対する支援サービスの情報提供

- 2) シリア人住民とトルコ人住民間におけるコミュニティ構築
- 3) シリア人住民間におけるコミュニティ構築

1つ目の目的を達成するため、コミュニティセンターの訪問者に対して、トルコ行政や他の支援団体が提供するサービスについての情報を提供している。単に情報を提供だけでなく、聞き取り調査を通じて訪問者の支援ニーズを把握し、必要な支援が受けられるよう手配している。2つ目と3つ目の目的を達成するため、コミュニティセンターでは講座やイベントを実施している。講座やイベントにはシリア難民だけではなく、センター周辺のトルコ人も参加している。これらの講座やイベントを通じて、参加者同士が顔なじみとなり、共通の話題を持つことで、相互理解に結び付くコミュニケーションをとることを目指している。具体的な講座内容としては演劇と歌唱、身体を使ったゲーム、ダンス、図画工作、裁縫、アクセサリ作りなどを実施している。イベントは、断食明けのお祭りなどの年中行事や天候に対応して、不定期に開催している。コミュニティセンターの位置する地区には、同市内の他地域と比べて経済的に貧しい住民が多い。したがって、経済的な事情などにより普段外出する機会が限られている女性やその子どもたちにピクニックや隣県の動物園訪問などの外出イベントなどを提供している。



Figure 5 女性向け講座を行っているときの保育スペース



Figure 6 音楽を通じた交流活動

左側きょうだい（男児・女児）の家庭がインタビューに応じてくれた（後述）

2019年度には、シリア難民 943 人が、センターにおいて利用可能なサービスについての情報を得るとともに、4,442 人（シリア難民 2,918 人、トルコ人 1,524 人）が講座やイベントに参加した。2018 年と比較すると、トルコ人の参加者数がほぼ倍に増えた。参加者を対象に実施したアンケート調査によると、71%の参加者が「コミュニティセンターでの活動を通して 3 名以上の新しい人間関係を築いた」と回答し、68%の受益者が「コミュニティセンターでの活動を通し、シリア人ないしはトルコ人に対する理解が深まった」と回答している。

センターの参加者から良い変化を見ることがができる。例えば、一人のシリア難民の子どもは以下のように語っている。「学校にいる時はいつも一人だった。トルコ人の同級生と話そうとしても、自分はトルコ語が話せないし、話そうとしても無視された。コミュニティセンターに来るようになってから、センターの先生が通訳してくれて、トルコ人の子どもと話すことができるようになった。学校でもトルコ人の友達を作るためにトルコ語を



Figure 7 子どもたちの活動①



Figure 8 子どもたちの活動②



Figure 9 ダンスを披露する女の子たち



Figure 10 シェアリングの時間

意見を出し合うこと、感情を言語化することを大事にしている

頑張って勉強したい。」

難民にとって公的サービスへのアクセスは不可欠であるが、公的サービスを補完するサービスもまた不可欠である。コミュニティセンターのような存在が、制度や文化の隙間を埋める役割を果たすことが非常に重要である。

(景平義文・吉川剛史)

6. シリア難民家族へのインタビュー

2019年10月にAAR Japanで支援を受けている2家族への家庭訪問及びインタビューの機会を得た。訪問者は、岡田、小原氏、吉川氏、通訳1名の4名である。インタビューをコーディネートした吉川から、答えたくない質問には回答する必要はないこと、不都合があればインタビューをいつでも中止できること、そそれによって不利益が生じることはないこと、録音と写真撮影をするが、実名を出さないなど個人が特定化されるようなことはないことを説明し、同意を得てからおこなった。

(1) いじめを受けている子どもの家族

AAR Japan コミュニティセンターを利用していきょうだいの家にインタビューに訪れた。妹2人がAAR Japan コミュニティセンターまで迎えに来てくれ、一緒に徒歩で、自宅に向かった。自宅に到着すると、母と6人の子どもたちが出迎えてくれた。我々に、チャイ（トルコの煮出し紅茶）とフルーツを出してくれもてなしてくれた。（トルコおよびシリアなどのイスラム文化圏ではおもてなしの風習が強く、経済的に困窮していても、来客にはチャイやフルーツ、スイーツなどをふるまう。この家族も、ESSNだけで生活しているので、貧困状況にあるが、最大限のもてなしをしてくれた。）

岡田：何人おこさんがいますか。年齢も教えてください。

母：7人です。でも今ここにいるのは3人です。女兒14才、男児15才、女兒17才です。一番上の子はシリアにいたときに戦争のせいで聴力に問題が起きたので、学校に行っていません。

岡田：その方はいますか。

母：家にいます。でも恥ずかしがりでここに来ませんでした。

岡田：（昨日、AARの活動に参加していた15歳の男の子に）昨日の音楽の教室は楽

しかった。

男児：楽しかった。

母：学校であるとき、彼がトイレにいて出てきたらトルコ人の男の子たちが手をかじったんです。それで彼がやり返したら、その子たちは彼を外に連れ出して、殴るけるの暴行をしました。いつも彼が学校に行くと問題がおきます。(どのくらいの頻度で？他の子は？)。彼だけ、毎日。

岡田：(男児に対して) 君はどう思う。

吉川：これはインタビューなので、もし答えたくなければ何も言わなくてもいいですよ。

男児：彼らのことは好きじゃないし、嫌になる。

吉川：先生は彼らのことを見えていますか。注意したり、助けに入ったりしていますか。

母：先生は彼らのことを見えていません。問題があると、だから彼を家に帰らせます。

吉川：噛まれた時、先生か誰かに言いましたか。

母：彼らを蹴って、そこだけ先生は見たので先生は彼を叱りました。そういうわけで指導を受けて、一週間学校に行けませんでした。(彼らはトルコ人、シリア人？何人？)。5人のトルコ人の男の子です。

母：彼が先生のところに行く前に、トルコ人の彼らが先生に言つけにきました。先生もトルコ人で、私(母)に家で彼を蹴ってもいいからしつけてくださいと言いました。

吉川：彼は先生とアラビア語か、クルド語かトルコ語で会話できますか。

母：彼はトルコ語を知らないし、先生はアラビア語を知りません。

岡田：いつもトラブルになるのはおなじ子どもたち？

男児：その5人は違うクラスで、別のクラスから休み時間になると僕のところに来ます。

岡田：お母さんは子どもたちのことについて、心配なこととかありますか。

母：彼は15歳だけど、まだ夜中におねしょ

をします。夜トイレに行けないんです。シリア人の医者に相談したのですが、理由はわかりませんでした。私は彼に心理的な問題があるんじゃないかと思っています。娘にも楽しく学校に行って欲しいと思っています。一番上の娘は離婚しています。

母：15歳で結婚しました。今彼女は17歳で、夫の暴力と義母の問題で離婚しました。彼らは娘を殺すかもしれないので、私は娘と孫達を家に連れて帰ってきました。それでも、元夫が誰かを送ってきて、子どもたちを返せ、そうしないと殺すと脅してきます。彼らは彼女から子どもたちを取り返したいのです。

母：娘はESSNカードを自分と子どもの分も持っているが、元夫が取り上げてしまいました。元夫は彼女の服も何もかも取り上げました。

小原：あなた(母)はESSNカード持っていますか。娘と孫の経済的な面倒は誰が見ていますか。

母：私はESSNを持っています。しかし、夫が仕事がある日もあるし、ないときもあります。彼は戦争のせいで、シリアにいたときに背中に怪我を負いました。そのせいであまり働けません。(父は何をされているんですか？)。パン屋で働いています。

母：他の二人の娘は暴力のせいで学校から追い出されたことがありました。一人はやり返して学校に戻りましたが、私が校長のところに行って抗議しましたが、彼らが言うにはシリア人動詞のことだからよくあることだ、これは普通だと。

岡田：子どもたちが困ったときや問題が起きた時に、助けるのを求められるのはどんな人がいますか。

母：私は学校の先生に直接抗議します。他の人には助けを求めません。娘が彼女を蹴った子を蹴り返した時、その子たちの親が何で蹴るんだと抗議しに来ました。あなた達

はシリア人かというので私はシリア人じゃない、アラブ人だと言いました。(どんな反応でしたか?) 長に講義すると言っていました。どうぞしてくださいと私は言いました。(彼らはトルコ人ですか?) シリア人です。

母：昨年、一番下の娘が学校に行きたくないというので理由を聞いたら、誰かに蹴られたからだと言いました。私が学校に行って抗議し、娘にはもし蹴られたら先生に言いなさいと言いました。そしたら、いじめは止まりました。しかし、毎週彼女は学校に行きたくないというのです。なぜだかわかりません。

母：私が孫娘たちを元父親のところに返したくないのは、彼女たちに学校をやめてほしくないからです。元父親は孫娘たちをずっと家において7, 8歳になったら無理やり結婚させるんです。私は彼女たちに学校に行ってほしいと思っている。

岡田：お母さんや子どもたちに聞きたいのですが、これからの願いとかありますか。

女兒(14歳)：お母さんは目が悪いので、私は医者になりたい。

子どもたち：(15歳男児) いま特に夢はない。(11歳女児) 先生になりたい。(14歳女児) 眼科医。医者であれば何でもよい。(子どもたちはここにこしているが、とてもシャイで、質問をすると母の顔をみて、ボソッと答えることが多い。)

母：息子(15歳)が小さかった時、弁護士になりたいと行っていました。でも彼はそんなに話すのが上手ではないみたい。

女兒17歳(2児の母)：自分の子どもたちには良い教育を受けさせて自分の未来を決めてほしい。元父親に取られたら、男の子は自分たちがそうだから運転手をする事になって、女の子は9歳か10歳で強制的に結婚させられてしまう。そうはなってほしくない。

岡田：何をしている時が一番楽しいか、ハッピーか。子どもたちとお母さんたちに。最後の質問です。

女兒17歳(2児の母)：客人が来る時です。だれも来てくれません。親戚は誰もここにはいません。

女兒11歳：キリスにいるお婆のところに行く時がすごく楽しい。

娘14歳：シリアの近くにいた時がとても幸せ。

女兒17歳(2児の母)：これまで楽しいことなどなかった。私が元夫の家にいた時、他の家に出向いたりするのを許さなかったし、母が訪れるのも許さなかった。彼らは家の窓にワイヤーを付けて私が出られないようにしたんです。4年間も。

母：娘が結婚する前、夫は他の人と3ヶ月間一緒にになりました。でも別れました。彼の母が私に、娘と結婚できないか頼んできたんです。これは彼女が夫から暴力を受けた時に病院からもらった診断書です。

吉川：これを警察に提出したんですか。彼女はセンターに来ましたか?

母：診断書を警察に出しました。そして、娘は離婚後、AARのセンターの料理教室に何度か行きました。

通訳：ここにいる子どもたちはうちのセンターにほぼ毎日きてくれています。

写真を取っても良いかと聞いたが、子どもたちだけなら可であるとのこと。シリア人女性は特に写真に写ることに抵抗があったり、配偶者の許可が必要であったりするようだ。多くのインタビューや訪問で、女性は写真に映ることを嫌う。

この家族はAARコミュニティセンターを日頃から活用していることもあり、深刻な話ができたが、始終和やかな雰囲気の中でインタビューが進み、終りの時間を迎えた。今回、インタビューを受けたのも、家族の逆境をシェアする隣人や親戚がおらず、



Figure 11 センターまで迎えに来てくれた妹たち



Figure 12 インタビューの答えてくれたシャイな子どもたち

AAR スタッフや日本からの来客に自分たちの話を聞いてもらいたかったこともあったとのこと。トルコ人とシリア人（クルド人も含め）、多文化や多様な経験下にある人々の関係や地域をつなぐサポートの重要性を感じたインタビューであった。（岡田智）

(2) 身体障害のある子どもの家族

AAR Japan コミュニティセンターから少し離れた場所にある家族のもとを訪ねた。この家族は、子どものみ身体的な問題で、AAR Japan の作業療法（OT）の訪問ケアを受けている。家に到着すると、3歳、0歳の子どもと母は、すぐに隣の部屋（キッチンスペース）に入り、父と上の3人の子どもがインタビューを受けてくれた。以下に、インタビューのやり取りを掲載する。

岡田：子どもは何人いますか。それぞれ何歳ですか。

父：女の子が3人、男の子が2人。これで全部です。15歳、13歳、11歳、3歳、そして10ヶ月の5人です。

吉川：家族の状況、全体的な状況を教えてもらえますか？

父：経済的事。支出が多くてトルコでの生活が難しい。3人の子どもは病気です。私自身も首をけがして、働いていません。私達はESSNカードを持っていますが他に収入はありません。したがって、物価の高いトルコで暮らすのは厳しいです。

小原：物価が去年上がった時、どうやって払いましたか。子どもの病院とか。

父：3人とも、病院では問題ないと言われたそうです。でも子どもには問題があると思います。長女は15歳なのにとっても小さいし、二番目は13歳ですがやはり小さく見えます。でも医者は普通だと言います。ビタミンをもらっただけです。医者を探していますが、どんな問題があるのか、誰もはっきりわからないのです。

（子どもたちは父の横に壁にもたれかかるように座り、にこにこしている。父や通訳の話をあまり理解していないように見える。また、13歳の子どもは岡田や小原に近づいてきて、手に持っている録音用のスマートフォンを触ってみたり、握手を求めたりして、インタビューに居合わせた3人の年長の子どもは知的に中から重度のハンディキャップがありそうな印象を受けた。他の15歳、11歳の子どもは歩行や姿勢維持にぎこちなさがある。この3人は身体的な障害があり、AARの作業療法チームのケアを受けている。）

父：この子どもたちは15歳、13歳、11歳になるけど、みんなおむつをつけている。体に障害がある。（子どもたちのズボンを下

げて、おむつを見せてくれた)。この子は背中を手術しました。彼は上手く歩けなくて、学校に入れませんでした。ここに移り住んで、2年と3ヶ月。どの学校も彼らを受け入れてくれませんでした。診断書は見せましたがダメでした。(15歳の長女の整形外科の診断書を見せてくれる。)

吉川：学校が受け入れてくれない理由は何でしょう。

父：精神的な障害があります。全員。例えば、15歳の子は、筆記用具が持てません。だから誰も受け入れないんです。残念です。体のことしか書いてありません。身体的には6歳児のようだと。これには彼女は15歳としか書いていない。全て正常。書いてあることは彼女は普通に歩くことができない。筋肉も動かせない。長女は6歳の時初めて歩いた。他の子ども歩くのが遅かった。下の2人は普通に歩いているのに、上の3人は、ひとりで外出して一人で戻ってくることもできない。トイレに行く時でさえ、彼らは動けない。いつも手を使います。食べる時手を使っていつも汚くします。スプーンは使えません。

岡田：こどもたちの楽しみってどういうことがありますか。

父：公園に行くと、彼らはとても楽しそうです。おもちゃを持って行くと、どうやって遊ぶかわからないので壊してしまいます。だから、たいていは一人で遊んでいます。

吉川：どのくらいの頻度で公園に行きますか。何をして遊びますか。

父：他の子どもと遊ぶと、蹴られてしまうので、他の子どもとは遊びません。彼は何もしないし、自分だけで遊びたいのです。こうやってなにか学ぶかもしれない。ブランコや滑り台で遊んでいます。

吉川：楽しいことは近くの公園に連れて行って、あそこでは周りの子どもたちに拒否されることもあるけど、お父さんにとっては

社会的な経験を積んでもらいたいということですね。

岡田：10ヶ月と3歳の子どもは何をして楽しんだり遊んだりしていますか。

父：彼らは学ぶのが早い。なので何かで遊ぶときはいつも、すぐに理解します。天才みたいです。この学校に行けない3人の子どもだけが問題です。

吉川：食欲はありますか。

父：だいたいいつもお腹をすかせています。もし部屋に牛乳があれば行って飲みます。水があればそれを飲みます。でも食事に関しては母があげないと、欲しいとは言いません。彼女らはあまり食べません。

小原：食料のサポートはありますか。

父：いいえ。カードはあっても十分ではありません。おむつが必要だし、食べ物とかい로운なことも。でも食用油も買えません。全く不十分です。買うお金がないので、親戚が時々食料をくれます。これをのぞいてはほとんど何もありません。

吉川：いつも何を食べていますか。どのように調理しますか。

父：だいたいじゃがいもです。肉は時々。肉はとても貴重です。時々トマト。お金がないので、油はありません。なので茹でるだけです。時々パン屋に行ってそこで料理してもらって持って帰ってきます。時々卵も食べる。シリアにいた時はジャガイモを油で料理していた。

吉川：もしよければ、いくらもらっているか聞けますか。

父：7人家族で1か月400ぐらい。一人120ぐらい。(当時、1トルコリラは日本円で15円程度。400リラは約6000円。120×7人家族で840になるが計算が合わず、その矛盾を指摘しても、父は理解できていないようだった。)

小原：仕事を見つけるのは難しいですか？

父：ビルで働いていて。(建築?)はいそう

いう感じの。でも首に問題があって、AAR 日本での支援で調べてもらいました。私も手術が必要です。でも3人の子どもがいてできません。もし手術をしたら誰も彼らの面倒を見られません。なので私は何もできないのです。首の問題のせいで、働けません。それに子どもたちのために手術は受けられません。そういうわけで働けません。

吉川：先ほど、家を変えたいと言っていましたね。暖房がないのですか。夏はすごく暑いとか。

父：夏はすごく暑い。冬はすごく寒い。去年の春は寒かった、冬の準備はありません。今年の冬をどうやって生き抜くかわかりません。(隣人はトルコ人・シリア人?)トルコ人です。近所の人(トルコ人)が薪をくれたりしてくれる。しかし、薪を買うお金がなくて困っている。2階のある家に移りたいが、子どもが階段を登れないので移れません。ここから動けません(この家は、床は薄いじゅうたんが敷かれているだけで、片隅に寝るためのマットレスが置いてある)。今家を変えて他に移ると、ESSNカードが止まります。なので変えたくないのです。3ヶ月に一度くるNGOからおむつをももらっていますし。

1時間ほどのインタビューを終えても、父は困窮状況と、金銭面、必要な日用品が必要であることをAARスタッフに訴えた。今回のインタビューでは謝礼はないことを事前に説明し、同意を得ていたが、父は金銭的、物質的援助を期待している様子も伺えた。また、身体的ハンディキャップは明らかであったが、それが生活困窮、栄養失調に起因する精神的発育不全も疑わせるような子どもたちであった。経済的困窮や身体・精神的ハンディキャップを抱え、教育不履行が生じながらも、来客の我々に笑顔と人懐っこさで向かい入れてくれた子どもたちの様子からは、アタッチメントや



Figure 13 身体にハンディを抱える子どもたちのいる家族

裸電球一つの暗い室内、コンクリート打ちっばなしの床にじゅうたんを敷いたところが居間になっている。

情緒的な安定性も感じさせる。重なる逆境状況にありながらも、家族からのケア、NGOからの地域ケアが丁寧に行なわれていると感じとれた。ただ、父のNGOなどの社会資源の活用も上手ではなく、親に対してのガイダンスも必要であった。難民支援のコンテクストでは、身体面以外の、子どもの認知発達や社会情動的発達には焦点が当たらない状況も垣間見れた。

7. トルコ南東部の都市の小学校への訪問およびインタビュー

2019年10月に、南東アナトリア地方にある小規模都市の小学校の校長、教員、スクールカウンセラーとの話をする機会を得た。岡田、現地コーディネーター、トルコ語・アラビア語通訳とで訪問した。この学校は児童数が4000人の大規模校で、小学校1年生から4年生までの一般の教育を行っている。なお、この訪問は小学校校長及び教職員の承諾を得て行われたが、非公式的訪問のために、学校名及び所在地、インタビューイは匿名とする。

校長との面談では、以下のことが述べられた。トルコ人とシリア人の数は半々くらいで、ここ数年でシリア人が急激に増えた。ほとんどのシリア人児童はトルコ語が分からず、教師はアラビア語が分からない。教師の負担が増えている。クラスによってはトルコ語が分かるシリア人に授業中の通訳を頼んでいることもある。教師は1-2年の

短期で移動することが多く、多くの教員がトルコ中央や北西部の学校への異動を希望しており、入れ替わりが激しい。そして、アラビア語やクルド語に対応できる教師はほとんどいないため、授業に苦慮しているとのこと。校長との面談には他の教職員は同席せず、筆者らが教職員との面談を希望すると、休み時間にその時間を設定してくれた。

教員へのインタビューのあとは、英語、算数をおこなっているクラスの見学をおこなった。日本と同じような部屋サイズに対して、60人前後の子どもたちが教室で授業を受けていた。児童も教員も日本人のゲストに興奮した様子で、授業は中断し、質問タイムがはじまった。トルコ語や英語でのやりとり、意味も分からず反応している児童も多くいたが、元気で活発な様子を受けた。授業中の教室、休み時間の廊下ともに込み合っていて、児童数の多さと聴覚的にも視覚的にも人の刺激の多さに、混沌といった印象を受けた（日本人が珍しいので、先生も含め、ただ単に興奮していただけかもしれない）。

授業の中休みには、教員10名程度がインタビューに応じてくれた。そこでは、トルコ人とシリア人の子どもの対立、シリア人の子とも同士でのいじめ、トルコ語が分からない子どもが多くなり授業が不成立になってしまうなど、シリア人の子どもの問題に対応が難しくなっているとのこと。教員からは難民の子どもの支援をしている地域のNPOには非常に感謝している。しかし、トルコ語の読み書きの支援をしてほしいことや、爆発的に増えた難民の子どもへの対応が難しく、どうしたらよいのかと強い口調での訴えが多くあった。休み時間が終わったが、ほとんどの教師はインタビューの部屋を後にしたが、数名の教師が残ってくれた。ある教師は算数などの授業にやむを得ずシリア人児童にトルコ語の勉強をさせていること、シリア人の子どもの様々な問題行動や心の傷などへの対応に苦慮していることなど、言いにくいことを吐露してくれた。

最後に、スクールカウンセラーとの面談をおこなった。校内には4人のスクールカウンセラーが

配置されている。すべてトルコ人で、アラビア語はなせないで、通訳がつくときがあるとのこと。タイムシフト制のようで、訪問時は1名のみ在校していた。主な役割は、暴力をとまなう生徒間の争いなどを仲裁すること、授業に集中したり、ついていくことが困難な児童を国立の発達センターに報告したり、連れて行ったりする。他の業務について尋ねると、時々、虐待予防などに関する授業を児童にすること。特別支援教育については、この学校には special class はないが、他の学校にはあるとのこと。4年生約900人いるが、8,9人くらいは特別なケアが必要であるが、障害がある子どもたちではないという。スクールカウンセラーを利用する児童は担当する4年生400人のうち5,6人だという。Autism や Intellectual Disability



Figure 14 南東アナトリア地方の小都市にある小学校

通りすがりにとった写真だが、多くの小学校は、建物、敷地、校庭など日本のと変わらない



Figure 15 訪問をした小学校の前で、下校途中の子どもたちを待ち構えて、学校に通っている子どもやそのお迎えの親に綿あめを売る子どもがいた（写真中央）

の児童はいるか尋ねると、不明であるという。ただ、Mental Problemのある子どもに、IQテストをしてもらうために、8, 9名の子どもを発達センターに連れていったとのことである（この8, 9名はすべてトルコ人）。

学校は午前中で終了となり（時間割、日程を聞き忘れたため、不明）、全校児童の下校中も見ることができた。校門を出たところでは、子どもたちでごった返す状況の中で、小学校高学年くらいの男の子が数名、下校途中の子どもやそのお迎えの親に綿あめを販売していた。学校の目の前で、学校にも行かず、学校に通う子どもたちに綿あめを販売している児童労働を目の当たりにした。

（岡田智）

8. まとめ

トルコにおける学校教育の状況、また、学校へのインタビュー、授業の見学、研究者からのレポートを通して、トルコの子どもへの教育や支援について混沌としている状況が見られた。家族的経済的背景、トラウマ、将来展望の欠如など心理的問題、そして子どもの注意欠如多動性障害、自閉症スペクトラム、知的障害などの神経発達の問題などが、シリア人児童の言語の問題や過密化する教室の問題に圧倒され、焦点化されない実情があった。また、トルコ政府と国際社会の支援を受ける難民当事者、難民を受け入れることによる学校などの公共サービスの変化と地域喪失、難民と地元民の相互理解の不足。このような状況下での、教員、家族のフラストレーションや無力感を感じるトルコ訪問となった。

シリア難民家族のインタビューからは、言語の問題や経済的な苦境に加えて、知的・身体的にハンディキャップを持つ子どもとその家族がさらに厳しい状況に追い込まれやすいことが感じられた。特に認知発達については、地域の医療機関や学校で認知されにくく、支援の必要性が見落とされるリスクがあることをいくつかのインタビューは示唆していた。認知されないことには、そこへのア

セスメントやケアが保障されることはなく、さらに、専門家も育たない。栄養状況や逆境環境を考えれば、発達障害リスクは高いはずである。難民支援のコンテキストでは子どもたちの認知、精神発達へのまなざしは優先されにくい事柄である。しかし、子どもの発達保障に向けた総合的、多角的視点が必要とされる。

また、難民の流入で公共サービスが過密化・多様化する状況では、ていねいな観察や聞き取りが難しいという実情が学校訪問と家族のインタビューで垣間見られた。国連機関による自治体支援やAARなどのNGOによるコミュニティセンターはこのようなギャップを埋める可能性があり、発達障害やスクールカウンセリングの専門家と連携して子どもの診断・ニーズの把握・支援体制の構築を行うことで状況の改善につながるのではないかと感じた。

（岡田智・小原啓吾）

謝 辞

本研究に協力をしてくださいましたAAR Japanのスタッフの皆様、子どもたち、保護者の方々、学校関係者の皆様に感謝申し上げます。本研究はJSPS 科研費 JP18H010870 の助成を受けたものです。

References

- Apak, H. (2014). *Suriyeli Göçmenlerin Kente Uyumları: Mardin Örneği (Adaptation of the Syrian Immigrants to Urban: A Case Study of Mardin)*. Mukaddime Dergisi, 5(4).
- Development Workshop. (2018). *Fertile Lands Bitter Lives – The Situation Analysis Report on Syrian Seasonal Agricultural Workers in the Adana Plain*.
- Erdoğan, Emre and Pınar Uyan Semerci. (2018). *Attitudes towards Syrians in Turkey*.
- European Commission's Directorate-General for European Civil Protection and Humanitarian Aid Operations. (2019). *Questions and answers: Support for refugees in Turkey through the Emergency Social Safety Net (ESSN)*. Retrieved December 4, 2019 from Relief Web Website: https://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/Questions_and_answers_Support_for_refugees_in_Turkey_through_the_Emergency_Social_Safety_Net.pdf

- International Crisis Group. (2018). *Turkey's Syrian Refugees: Defusing Metropolitan Tensions*. Retrieved December 4, 2019 from International Crisis Group Website: <https://d2071andvip0wj.cloudfront.net/248-turkey-s-syrian-refugees.pdf>
- Kaya, A., & Kırac, A. (2016). *Vulnerability Assessment of Syrian Refugees in İstanbul (Rep.)*. İstanbul: Suporttolife.
- Ministry of Interior Disaster and Emergency Management Presidency (AFAD). (2014). *Syrian Guests in Turkey*. Retrieved 30 November, 2019, from AFAD Website: <https://www.afad.gov.tr/upload/Node/3494/xfiles/syrian-guests.pdf>
- Özel, D. (2018). *Examining Needs and Issues of Refugee-Receiving Schools in Turkey from the Perspectives of School Counselors* (Unpublished master's thesis). Ankara, Middle East Technical University.
- Turkish Statistical Institute. (2013). *Child Labour Force Survey 2012*. Retrieved 7 December 2019 from TurkStat Website: <http://www.turkstat.gov.tr/PreHaberBultenleri.do?id=13659>
- United Nations High Commissioner for Refugees. (2018). *Operational Update: Turkey 2018*. Retrieved December 5, 2019 from Relief Web Website: <https://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/67514.pdf>
- United Nations System in Turkey. (2019). *Regional Refugee & Resilience Plan 2019-2020 in Response to the Syria Crisis*.
- UN Women. (2018). *Needs Assessment of Syrian Women and Girls Under Temporary Protection Status in Turkey*.
- 吉川剛史. 2018. AAR Japan 活動ニュース トルコ：シリア難民支援「小さな変化の積み重ねが、大きな変化となることを目指して」2018年12月28日掲載, 2019年12月閲覧. https://www.aarjapan.gr.jp/activity/report/sp/2018/1228_2685.html
- World Food Programme (2019). *The Emergency Social Safety Net (ESSN) Helping Refugees in Turkey*. Retrieved 5 December 2019 from WFP Website: <https://docs.wfp.org/api/documents/WFP-0000104792/download/>

Abstract

In October 2019, Obara and Okada had an opportunity to visit a community center for Syrian refugees and host communities in Turkey run by AAR Japan, an international NGO and also to interview Syrian refugee families who have children. We also met with researchers working on school counselling and refugee assistance. Through a field work in Turkey, this report attempted to understand the current situation of Syrian refugee children in Turkey and the possibilities to improve child development support. Takefumi Yoshikawa from AAR Japan also provided a report on AAR Japan's support to Syrian refugee children and women in Turkey. Furthermore, Ms. Dilara Özel from the Middle Eastern Technical University who has been conducting researches on school counselling in Turkey provided a report on the current situation of Turkish schools receiving Syrian children. The field work and provided reports suggest that the neurodevelopmental issues (cognitive development in particular) and psychological challenges receive insufficient attention due to other overwhelming issues such as poverty, multilingual problems and overcrowded classrooms. While more Syrian refugees reside in local communities and the number of Syrian refugee students continue to increase, municipal services including school education are overburdened with increased and diversified demand. Failure in meeting such needs could negatively affect community integration and potentially lead to further isolation of refugees. Support to municipal services by the United Nations agencies and provision of community center services by NGOs such as AAR Japan have potential to fill such gaps and to improve the situation particularly through a collaboration with experts on child development and school counseling who can support the referral of children with cognitive disabilities, as well as identification their needs and the establishment of support mechanism.

